

201123031A

平成 23 年度 厚生労働科学研究費補助金

新型インフルエンザ等新興・再興感染症研究事業

研究課題番号 H22 - 新興 - 一般 - 016

情報弱者等への配慮を含めた感染症に対する  
適切な情報提供・リスクコミュニケーション  
に関する研究

総括・分担研究報告書

研究代表者 丸井英二 (順天堂大学医学部公衆衛生学教室)

## 目次

研究報告	
総括	・・・1
Webによる感染症リスク認知と双方向性リスクコミュニケーションの可能性に関する研究	・・・3
若年者の感染症に対する関心と情報収集に係る研究	・・・9
高齢者の感染症に対する関心と情報収集に係る研究	・・・15
幼児向け感染症予防啓発媒体の開発	・・・17
小学生を対象にした「カルテット」教材利用可能性の検討	・・・21
感染症発生動向と新聞記事の関連性に関する研究	・・・25
Webを利用した国民の感染症に対するリスク認知に関する研究	・・・27
研究班名簿	・・・31

平成 23 年度厚生科学研究費補助金(新型インフルエンザ等新興・再興感染症研究推進事業)  
「情報弱者等への配慮を含めた感染症に対する適切な情報提供・リスクコミュニケーションに関する研究」

## 総括研究報告

研究代表者 丸井英二 (順天堂大学医学部公衆衛生学教室)

リスクコミュニケーションの本来のあり方を考えていくと、一方的に情報提供を行うのではなく、社会における情報弱者の立場で受け取り、あるいは情報のやり取りを行うことも考慮しておく必要がある。情報弱者として想定するのは、学童、視聴覚障害者、外国人あるいは高齢者などである。しかし、だれが情報弱者であるかは場面や情報の内容によっても変わる可能性があり、それもまた研究を要するテーマの一つともなるであろう。

今年度は多くの分担研究者によって、リスクコミュニケーション全般ならびに、年齢層別に特定の集団を対象として研究が進められている。

まず、感染症予防を目的とした「手洗い」の習慣化のために、紙芝居とそのなかのギミックを利用した教材を開発(試作)した。幼児の感染症に関する生活習慣は正確な知識に基づくというよりは、楽しみながら日常の動作に組み入れていくことが可能であるかを検討したものである。(「幼児向け感染症予防啓発媒体の開発」)

小学生については、従来から開発研究ならびに評価を行ってきたゲーム形式の教材とくに「カルテット」を利用できるかに関して現場での評価検討を行った。人獣共通感染症に対する情報提供として、狂犬病をテーマとした「わんわんカルテット」の集団対象の利用可能性について検討した。小学 4 年生 70 名を対象として、授業の指導要項を作成しゲームの前後に 10 問のクイズを質問紙として配布し、知識習得状況について評価した。その結果、すべての質問について第 2 回目の正答率が上昇し、プレイにより知識が習得できていることがわかった。学校だけでなく、今後は外部のイベントなどでの利用可能性が示唆された。(「小学生を対象とした『カルテット』教材利用可能性の検討」)

次に、もう少し年齢が上がった若年者 (16-19 歳)を対象に携帯電話による web 調査を実施し、感染症に対する関心と態度を検討した。この年代は感染症罹患リスクが高く、かつある意味で情報弱者と考えられる。若年者は、感染症に対する関心は低く、情報提供には、インターネットやテレビを通じての実施が有効である。その際に利用する用語については適切な解説の添付や言い換え等の工夫が必要である。(「若年者の感染症に対する関心と情報収集に係る研究」)

リスクコミュニケーション全般のテーマとして、感染症の発生動向とメディア報道の実態の関連性について、新聞記事を利用した分析を行った。(「感染症発生動向と新聞記事の

関連性に関する研究)「感染症」「肺炎」「破傷風」「食中毒」を検索キーワードとしておこなった。事例報道よりは感染症発生予防のための注意喚起の記事が多く、さらに記事内容分析が必要である。

リスク認知状況を継続的に把握することは、効果的なリスクコミュニケーションのために重要かつ必要なことである。今回、2011年9月に、全国約1000人を対象としたWeb調査で現状を把握した。各感染症の項目では、「狂犬病」「エボラ出血熱」について「危険がある」という回答は約50%と低く、「新型インフルエンザ」が最も高く約80%であった。男女や地域による分析をすすめ、過去の報告と比較検討の必要がある。(「Webを利用した国民の感染症に対するリスク認知に関する研究」)

以上のように、感染症のリスクコミュニケーションに関しては、思わぬところに落とし穴が存在する可能性がある。情報提供だけでなく、リスク認知を適切に把握したうえで、知識を高め、双方向のコミュニケーションをさらに図る必要がある。そのための研究を続ける予定である。

厚生労働科学研究費補助金（新型インフルエンザ等新興・再興感染症研究推進事業）  
「情報弱者等への配慮を含めた感染症に対する適切な情報提供・リスクコミュニケーションに関する研究」

## Web による感染症リスク認知と双方向性リスクコミュニケーションの可能性に関する研究

研究分担者	重松美加	国立感染症研究所感染症情報センター
研究分担者	吉川肇子	慶應義塾大学商学部
研究分担者	山崎瑞紀	東京都市大学環境情報学部

研究要旨 災害の時と同様に、感染症の大規模流行や集団発生において既存の情報媒体からの積極的情報入手に困難を覚える「情報弱者」が存在する。健康危機や感染症への対策が最終的には個人の理解と協力を得ないと実効性を持たないことが、新型インフルエンザ対策を始め様々な場面で明らかになった。本分担研究では、実際にサーバ上で WEB ページを作成して情報発信し、情報弱者等への配慮を含めた感染症に対する適切な情報提供・リスクコミュニケーションについての検討するため、「情報弱者」を定義し、対象人口のニーズや対応行動等の情報に基づきコンテンツと WEB ページのデザインの検討を行った。

### A. 研究目的

感染症対策に関する情報発信は、20 世紀後半から大きくその需要が変わってきた。これまで医師の診療室で得てきた情報を、インターネットやテレビ、携帯端末を介して入手する様になっている。必要な時に必要と思う情報を入手し、参考にする時代となっている。これら情報の取り扱いについての問題点はあるが、1969 年以降に自己増殖してきたインターネットや携帯端末によるネットワークなどを自在に利用できる人々がいる一方で、必要な情報の入手に困難を覚える人口が存在する。

本分担研究では、危機対応および感染症についての情報の入手に困難を覚える「情

報弱者」を定義し、種々の調査から集めた対象人口のニーズや対応行動等の情報に基づき、実際にサーバ上で WEB ページを作成して情報発信し、利用者の情報量の変化や満足度について調査し、情報弱者等への配慮を含めた感染症に対する適切な情報提供・リスクコミュニケーションについての検討を行う。

### B. 研究方法

情報弱者の概念を整理し、分担研究の対象とする人口を定義する。対象は研究班としてアクセス可能であることなど、一定の条件を満たす「情報弱者」群とした。

これまでの調査や資料から、対象群のニ

ーズを検討し、情報発信のコンテンツとWEBデザインの方針を決定し、テスト版を作成し、改良を加えていった。

## C. 研究結果

### 1) 情報弱者の定義

感染症や健康危機管理に際して、「情報の入手に際して障壁がある人」を本分担では「情報弱者」として定義した。

### 2) 対象人口の特徴

健康危機管理に際して、情報の周知が十分では無いと考えられる対象としては、まず以下を想定した。

- ① 小児
- ② 学童、生徒
- ③ 高齢者
- ④ 視聴覚障害
- ⑤ 来日中の日本語以外を母国語とする人たち（留学生を含む）
- ⑥ 海外に居住する人たち（ここでは日本語を解する方とする）

この中で、今回分担研究としてWEBを介しての発信に焦点を絞り検討することから、インターネットを使えない人は対象としないこととした。つまり、「インターネットで情報を探することができるが、得意でない人」の問題解決を目標とした。

小児、幼児は自律性や予防行動の主体が母親であると考えられることから、年齢が関連した情報入手に際して困難を覚える群として、②と③を取り上げた。両群における情報入手における障壁の違いについては、実態調査を参照した。③は60歳ぐらいから上の年齢を想定することとした。

視聴覚障害のある方々の利便性について

の取り組みは、機械的、技術的な分野で、すでに色覚系等にアクセサビリティの基準が存在しているため、情報提供者がコストをかけ仕様を指定して発注をすれば、対応が可能である。その技術向上や改良の希望についての要望調査は可能だが、分担研究班が目標としているコンテンツやデザイン改良による対象群にとって使い勝手の良いWEBの作成には繋がらないため、今回の対象群とはしなかった。

海外居住者にとっての情報入手の困難は、多くの方々がインターネットやテレビ等の媒体で情報収集を試みる中、国内からの対象事項に関する情報発信が行われないことが大きな理由とされており、感染症や危機対応の情報を発信すべき機関や施設側の対応の問題であり、コミュニケーションの在り方の検討では改善できないため、今回の対象群とはしなかった。

⑤の日本語を母国語としない日本国内に居住する方々、留学生や外国人居住者、中長期の滞在者で情報入手に困難を覚えている方については、情報の翻訳で対応できるのではあるが、感染症等について発信している英語情報だけでも不足がちである。既存の翻訳ソフトなどでの対応も、感染症分野、特に公衆衛生の分野や医療分野の用語に対応したフリーソフトの機能にも限界があり、言語等に縛られないアプローチ方法などの検討を開始するとともに、具体的な障壁の把握のために、ニーズ調査を検討している。

### 3) 感染症情報の提供・WEBの作成

#### ①日本語を日常的に使う人口

上記の定義に合う普通の人、②群は中学生、高校生を想定した。基本デザインをユ

ユーザーが直観的に使いやすいようにデザインし、コストがかからず、WEBサイトの操作性の低下につながらない機能は搭載する方針でモックサイトのデザインを行った。今後アクセサビリティの向上による利用変化の検討が必要となる。

②日本にいる日本語以外のコミュニティの人たち（留学生、研修生らも含む）を想定して、言語によらず直観的に利用できるデザインに配慮した。

#### 4) モック WEB 上のコンテンツ対象の検討

利用者に研究協力という意味以外での活用モチベーションを与える内容とすることも考慮し、モック WEB サイトで取り上げる疾患を検討した。候補として、インフルエンザ、ウエストナイル熱、細菌性食中毒、麻疹が上がった。

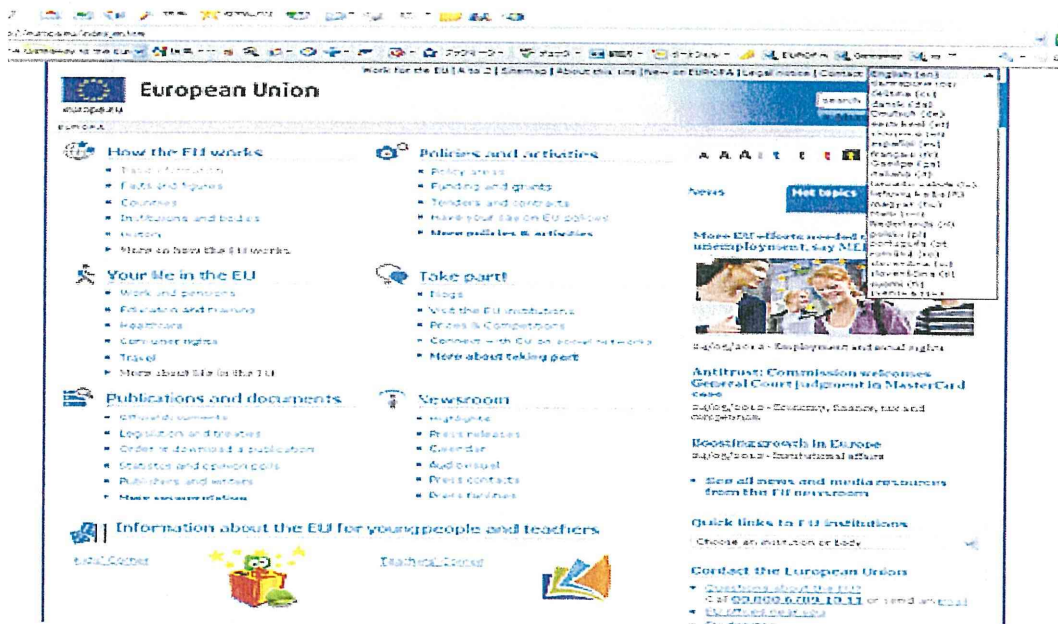


図1. 多言語、色弱者への配慮をしたページ例  
( [http://europa.eu/index\\_en.htm](http://europa.eu/index_en.htm) )



## 流行っている感染症とその予防方法

感染症名	予防接種	予防薬	隔離	発熱	咳	嘔吐	下痢
細菌性髄膜炎	○	○					
細菌性出血性大腸菌	○						○
ウエストナイルウイルス	○	○					○
HIV	○			○			
HTLV-1	○			○			
ノロウイルス	○					○	○
高病原性鳥インフルエンザ	○	○					
ポリオ	○						○
日本脳炎	○	○					
麻疹ウイルス	○						○
クリプトスポリジウム							○

図2. 第1稿デザイン

感染症情報

セルフチェック

感染症名	Fever 発熱	Stomachache 胃痛	Headache 頭痛	Cough 咳	Rash 発疹	Nausea 嘔吐	Vomiting 下痢
細菌性髄膜炎	○						
細菌性出血性大腸菌							○
ウエストナイルウイルス	○						○
HIV						○	
HTLV-1						○	
ノロウイルス						○	○
高病原性鳥インフルエンザ	○						
ポリオ							○
日本脳炎	○						
麻疹ウイルス							○
クリプトスポリジウム							○

1 2 3 4 5 6 7 印刷

はい YES

いいえ NO

1 2 3 4 5 6 7 印刷

はい YES

いいえ NO



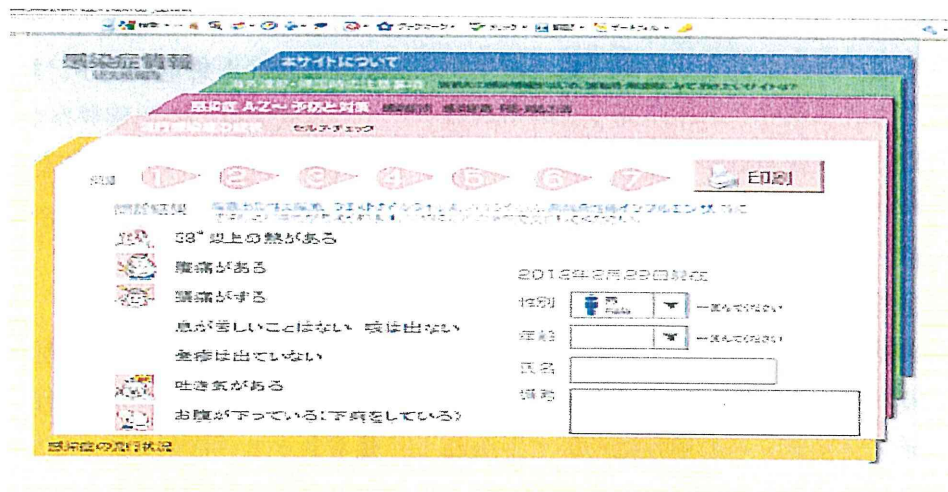


図3. 第3稿 WEB デザイン

#### D. 考察

感染症や健康危機管理における「情報弱者」つまり「情報の入手に際して障壁がある人」は、多種多様の理由から発生している。声高に情報発信の重要性が言われ、情報の正確さやタイムリー性が問われているが、発信した情報を受け取る側の問題解決支援への配慮は未だ不足している。対象人口を絞った媒体の選択や表現方法の検討では、マイノリティへの周知について十分な配慮がされているとは言えない。本分担任では結果に示した「情報弱者」の定義の対象者が、感染症にかかわる必要な情報を、最も情報発信の多いインターネットから入手活用できる様なコミュニケーション方法を検討している。

現在の第3段階のWEBドラフトでは、感染症症状を呈した際に受診を促す様に、必要な情報の用意を支援し、感染症の現況を知り、次の対応を検討できる様な構成とした。ユーザの思考過程とニーズを確認しつつ、直観的利用が可能なデザインを目指している。

WEBは、色彩等の改良の余地があるが、基本的方向性が見えてきた段階にある。感染症に関するコンテンツは、専門機関とはことなり常に最新の情報を提供することはできないため、感染症（ライブ情報を含む）のポータル・サイトの的な位置づけと考えている。1ページ内に大量かつ種々の情報を提供すると、どこに何があるか分からなくなり、情報の利用以前に情報自体を見つけれないなるため、画面ごとに本のページをめくる感覚で情報の主題を管理する様にした。追加情報を求める人は、更に専門機関のページへ誘導する。Q&Aの形で、自分

の疑問をスタート地点として情報を手繰る形での進展を想定したが、箇条書きでなくこの形式を保つ点に困難がある。

最終年度に向け、対象者に対して公開し、利用しての変化などの調査を予定している。

#### E. 結論

感染症の大規模流行や集団発生において既存の情報媒体からの積極的情報入手に困難を覚える「情報弱者」に対する感染症リスク認知と双方向性リスクコミュニケーションの可能性を探るため、同人口を対象としたWebサイトの作成を行った。最終年度は、Webデザインとコンテンツの修正を行い、公開して、その効果を検討する予定である。

#### F. 健康危険情報

なし

#### G. 研究発表

##### 1. 論文発表

なし

##### 2. 学会発表

なし

#### H. 知的財産権の出願・登録状況（予定を含む）

なし

厚生労働科学研究費補助金（新型インフルエンザ等新興・再興感染症研究事業）  
「情報弱者等への配慮を含めた感染症に対する適切な情報提供・リスクコミュニケーションに関する研究」

若年者の感染症に対する関心と情報収集に係る研究

研究分担者 城川美佳 富山大学専門医養成支援センター  
研究分担者 堀口逸子 順天堂大学医学部

研究要旨： 感染症罹患リスクが高く、かつ情報弱者と考えられる若年者（16-19歳）を対象に携帯電話によるweb調査を実施し、感染症に対する関心と態度を検討した。若年者は、感染症に対する関心は低いことが示された。こうした若年者に対しての情報提供には、インターネットやテレビを通じての実施が有効であるが、その際に利用する用語については適切な解説の添付や言い換え等の工夫が必要と考えられた。

A. 研究目的

感染症罹患リスクが高く、かつ感染症に対する情報の収集という点において情報弱者と考える若年者の、感染症に対する関心と態度を把握する。

B. 研究方法

調査対象者は、日本国内在住の16-19歳約300人とした。本調査は内容によって2つの調査票から構成される。各調査票で150人程度の回答者を得た。調査は、携帯電話によるweb調査で実施した。調査票は、本調査研究の目的にしたがって研究者らが作成したものを使用した（資料A、B）。調査Aでは感染症に対する関心と情報収集の態度、Bでは感染症に関連した用語に関する知識、とした。調査対象者は、web調査を委託する調査会社が持つパネル（調査協力者として登録している者）から抽出した。

調査は、平成24年1月に実施した。  
（倫理面への配慮）

調査は、個人を特定する質問項目（氏名、居住地）を省いて実施した。なお、本調査実施を委託した調査会社は、(財)日本情報処理開発協会による「プライバシーマーク」を取得しており、登録者の個人情報保護を十分に配慮している組織である。

C. 研究結果

回答者は、調査Aで155人、調査Bは149人であった。

1. 感染症に対する関心

「感染症（伝染病）について情報を探すことはあるか」という質問に対しては、調査A、Bともに全体の60%以上が「特にない」と回答した（調査A：65%、調査B：68%）。「心がけて調べている」との回答は調査Aで3%（5人）、調査Bで2%（3人）であった。

## 2. 感染症に関する情報収集の態度

「感染症（伝染病）について、情報を探すとしたら何を使うか」という質問に対して複数回答で回答を得た。最も多かったのは「インターネット（携帯サイトも含む）」で96%（148/155）であり、次いで「テレビ」（70%、108/155）、「新聞」（41%、64/155）、「友人や家族（チャット、SNSを含む）」（40%、62/155）であった。

## 3. 感染症の関連用語に関する知識

感染症に関連した用語を15語列举し、これらの用語のうち「意味が分かるもの」を複数回答で得た。最も回答が多かった用語は「ワクチン」（95%）であり、「意味が分かるものがない」との回答も1人から得た。

90%以上の回答が得られた用語は、「ワクチン」（95%、141/149）、「免疫」（92%、137/149）、「ウイルス」（91%、136/149）の3語であり、半数以上の者が「意味が分かる」とした用語は、「伝染病」（89%、132/149）、「細菌」（85%、127/149）、「感染症」（83%、123/149）、「感染経路」（77%、114/149）、「病原体」（75%、111/149）、「狂犬病」（64%、96/149）であった。「キャリア」、「疫学」、「アウトブレイク」はいずれも「意味が分かる」との回答者が全体の20%未満であった。

## D. 考察

若年者のうち、10代後半は社会的に活動範囲が広がる一方で、小児期に獲得した受動免疫が低下する等、感染症の罹患リスクが高まる時期と考えられ、感染症予防に関する知識の提供が必要と考えられる。しかしながら、今回の調査結果からは、感染症に関する関心は低く、情報収集については

「積極的ではない」との回答を加えても「（収集を）心がけている」との回答は35%にとどまった。

こうした若年者の情報収集媒体として、「インターネットサイト」の回答者が最も多かったが、これはweb調査のパネルを利用していることが影響している可能性がある。しかしながら、実際のインターネットの平均利用時間はパソコンで3時間、携帯電話で2.4時間であり、利用時間が少なくても、インターネットサイトが身近な情報収集媒体であると考えられた。また、「テレビ」を挙げる者も70%おり、この2つの媒体での情報提供が望ましいと考えられた。

感染症の情報提供においてよく利用される用語として15語を選択し、これらの用語の知識を調べた。感染症を示す用語（「感染症」「伝染病」）、感染症予防・対策に関連する用語（「ワクチン」「免疫」「感染経路」）、感染症の病原体に関する用語（「ウイルス」「細菌」「病原体」）は、いずれも70%以上の者が「意味が分かる」と回答した一方で、感染症の状況を示す用語である「パンデミック」「キャリア」「アウトブレイク」「疫学」「耐性菌」はともに半数以上が選択されていない。また、感染症・病原体を示す「狂犬病」「クラミジア」は「意味が分かる」との回答者は半数程度であった。

## E. 結論

本調査結果より、感染症罹患リスクが高いと考えられる若年者は、感染症に対する関心は低いことが示された。こうした若年者に対しての情報提供には、インターネットやテレビを通じての実施が有効である

が、その際に利用する用語については適切な解説の添付や言い換え等の工夫が必要と考えられた。

F. 研究発表

1. 論文発表  
なし
2. 学会発表  
なし

G. 知的財産権の出願・登録状況  
(予定を含む)

1. 特許取得  
なし
2. 実用新案登録  
なし
3. その他  
なし

表1 回答者の概要

単位：人（％）

		調査A	調査B
総数		155 (100)	149 (100)
性別	男性	47 ( 30)	51 ( 34)
	女性	108 ( 70)	98 ( 66)
年齢	16歳	11 ( 7)	16 ( 11)
	17歳	28 ( 18)	31 ( 21)
	18歳	38 ( 25)	37 ( 25)
	19歳	78 ( 50)	65 ( 43)
PCでのインターネット利用時間	利用しない	5 ( 3)	
	1時間	35 ( 23)	
	2時間	40 ( 26)	
	3時間	36 ( 23)	
	4-5時間	28 ( 18)	
	6時間以上	11 ( 7)	
携帯電話・スマートフォンでのインターネット利用時間	利用しない	4 ( 3)	
	1時間	64 ( 41)	
	2時間	38 ( 25)	
	3時間	24 ( 15)	
	4-5時間	14 ( 9)	
	6時間以上	11 ( 7)	

表2 「日常、感染症（伝染病）について、情報を探すことはありますか」

単位：人（％）

	調査A	調査B
総数	155 (100)	149 (100)
特になし	101 ( 65)	101 ( 68)
調べるように心がけているが、積極的にはしていない	49 ( 32)	45 ( 30)
心がけて、調べている	5 ( 3)	3 ( 2)

表3 「感染症（伝染病）について、情報を探すとしたら何を使いますか」

単位：人（％）

総数	155 (100)
インターネット（携帯サイトも含む）	148 ( 96)
テレビ	108 ( 70)
新聞	64 ( 41)
友人や家族から（チャット、SNSを含む）	62 ( 40)
学校	40 ( 26)
雑誌	22 ( 14)
リーフレット	10 ( 7)
ポスター・中吊り広告	6 ( 4)
ラジオ	3 ( 2)
その他	2 ( 1)

\*複数回答にて得た

表4 「次の病気に関する用語・言葉について、意味が分かるものをお選びください」

単位：人（％）

総数	149 (100)
意味の分かるものがない	1 ( 1)
ワクチン	141 ( 95)
免疫	137 ( 92)
ウイルス	136 ( 91)
伝染病	132 ( 89)
細菌	127 ( 85)
感染症	123 ( 83)
感染経路	114 ( 77)
病原体	111 ( 75)
狂犬病	96 ( 64)
クラミジア	70 ( 47)
耐性菌	65 ( 44)
パンデミック	60 ( 40)
キャリア	27 ( 18)
疫学	18 ( 12)
アウトブレイク	14 ( 9)

\*複数回答にて得た



厚生労働科学研究費補助金（新型インフルエンザ等新興・再興感染症研究事業）  
「情報弱者等への配慮を含めた感染症に対する適切な情報提供・リスクコミュニケーションに関する研究」

高齢者の感染症に対する関心と情報収集に係る研究

研究分担者 堀口逸子 順天堂大学医学部

研究分担者 城川美佳 富山大学専門医養成支援センター

研究要旨： 感染症罹患リスクが高く、かつ情報弱者と考えられる高齢者（65歳以上）を対象にweb調査を実施し、感染症に対する関心と態度を検討した。本調査結果より、高齢者の感染症に対する関心は低いことが示された。高齢者に対し、インターネットでの情報提供は有用であるが、情報に到達しやすい工夫が必要と考えられた。

A. 研究目的

感染症罹患リスクが高く、かつ感染症に対する情報の収集という点において情報弱者と考えうる高齢者の、感染症に対する関心と態度を把握する。

B. 研究方法

調査対象者は、日本国内在住の16-19歳約300人とした。

調査は、携帯電話によるweb調査で実施した。調査票は、本調査研究の目的にしたがって研究者らが作成したものを使用した（資料A）。内容は、感染症に対する関心と情報収集の態度である。

調査対象者は、web調査を委託する調査会社が持つパネル（調査協力者として登録している者）から抽出した。

調査は、平成24年1月に実施した。

（倫理面への配慮）

調査は、個人を特定する質問項目（氏名、居住地）を省いて実施した。なお、本調査実施を委託した調査会社は、（財）日本情報

処理開発協会による「プライバシーマーク」を取得しており、登録者の個人情報保護を十分に配慮している組織である。

C. 研究結果

回答者は、331人であった。男女比6/1、年齢群別では65-69歳が最も多く回答者の半数を占めた。居住地域別では、関東が最も多く（47%）、職種別では「無職」との回答が最も多かった（62%）。

1. 感染症に対する関心

「感染症（伝染病）について情報を探すことはあるか」という質問に対して、全体の62%（205/331）が「特にない」と回答し、「心がけて調べている」との回答は3%（11/331）であった。

2. 感染症に関する情報収集の態度

「感染症（伝染病）について、情報を探すとしたら何を使うか」という質問に対して上位3種まで回答を得た（表2）。上位1-3位のいずれも、「インターネット（携帯サイトを含む）」「新聞」「テレビ」の回答

が多かった（上位1位：「インターネット[55%]」「新聞[24%]」「テレビ[18%]」、上位2位：「新聞[35%]」「テレビ[32%]」「インターネット[14%]」、上位3位：「新聞[24%]」「テレビ[24%]」「インターネット[18%]」）。回答者の約86%は感染症関連情報の収集にインターネットを利用すると推計された。

### 3. インターネットの利用時間

パソコンを利用する場合と携帯電話・スマートフォンを利用する場合での1日でのインターネット利用時間を質問した。パソコンでは「2時間」との回答が最も多く（28%）、次いで「3時間」（23%）であった。携帯電話・スマートフォンでは、回答者の64%が「使わない・持っていない」と回答し、「利用している」との回答者のうち57%（全体の21%）は1日での利用時間が「1時間未満」と回答した。

### D. 考察

高齢者は免疫能が低下する等、感染症の罹患リスクが高まると考えられ、感染症予防に関する知識の提供が必要と考えられる。しかしながら、今回の調査結果からは、感染症に関する関心は低く、情報収集については「積極的ではない」との回答を加えても「（収集を）心がけている」との回答は38%であった。

逐次的に適切な情報を提供できる媒体として、インターネットが注目されている。本調査では、高齢者でもインターネットを通じた情報提供の可能性に着目し、web調査で回答を収集した。web調査のパネルとして登録し、普段のインターネット利用が

あると考えられる高齢者では、86%が感染症に関連した情報の収集媒体に「インターネット」を挙げ、当該媒体による情報の提供は高齢者においても有用と考えられた。

ただし、本調査ではインターネット利用時間が2-3時間との回答者が半数以上であり、検索を含めて短時間に情報が得られるような工夫が必要と考えられた。また、携帯電話やスマートフォンを情報収集媒体として利用している者は36%に過ぎず、また利用者での利用時間は1時間未満と非常に短時間であり、提供媒体やその方法を検討する必要があると考えられた。

### E. 結論

本調査結果より、高齢者の感染症に対する関心は低いことが示された。高齢者に対しても、インターネットでの情報提供は有用であるが、情報に到達しやすい工夫が必要と考えられた。

### F. 研究発表

1. 論文発表  
なし
2. 学会発表  
なし

### G. 知的財産権の出願・登録状況 (予定を含む)

1. 特許取得  
なし
2. 実用新案登録  
なし
3. その他  
なし

厚生労働科学研究費補助金(新型インフルエンザ等新興・再興感染症研究事業)

「情報弱者等への配慮を含めた感染症に対する適切な情報提供・リスクコミュニケーションに関する研究」

幼児向け感染症予防啓発媒体の開発

研究分担者	吉川肇子	慶應義塾大学商学部
研究分担者	杉浦淳吉	愛知教育大学教育学部
研究分担者	金田英子	東洋大学法学部
研究分担者	山崎瑞紀	東京都市大学環境情報学部
研究分担者	高木彩	千葉工業大学社会システム科学部
研究分担者	濱田篤郎	東京医科大学病院渡航者医療センター
研究分担者	竹中伸一	財団法人結核予防会結核研究所
研究分担者	早坂信哉	順天堂大学医学部
研究分担者	福島慎二	東京医科大学感染制御部
研究分担者	堀口逸子	順天堂大学医学部
研究分担者	城川美佳	富山大学専門医養成支援センター

研究要旨

感染症予防を目的とした「手洗い」の習慣化のために、紙芝居とそのなかのギミックを利用した教材を開発（試作）した。ギミックは、コスト等から、石鹸や水がないなかで、3次元の「動作」を目で確認し、同じ動作を参加者とともに実施するものである。

今後は、試行し改訂し評価をする必要がある。

A. はじめに

WHOの感染症予防啓発教材など、これまで幼児向け媒体として「紙芝居」が用いられてきた。

紙芝居の特徴は、不特定多数に対応でき、小学校入学前の幼児以上が対象で、1名の読み手だけで使用される。紙芝居の効果測定は困難であるが、これまで多用されてきていることから、一定の効果があることが考えられる。

今回の紙芝居は、「読み聞かせられる」のみでなく、聴衆が「参加できること」また「三次元」で対応できることを特徴として開発した。

またテーマを「手洗い」に限定し、いくつかの場面を想定することとした。

B. 研究方法

国際学校保健学研究者による海外における紙芝居利用の資料を収集した。

また、イベントで紙芝居を利用している(株)イオンファンタジー社員へのヒアリングを実施した。

研究者間で、結果をもとに案を作成した。

C. 研究結果及び考察

場面は、研究者間のディスカッションにおいて、1) 外出先からの帰宅時、2) トイレ後、3) 食事前の3場面とした。一般的な

感染症予防行動である「手を洗う」ことのタイミングとしての場面を想定しており、個々の効果に期待するものではない。また「手洗い」を日常生活のなかの各場面での習慣化をねらいとしています。

ヒアリングの結果から、子どもの集中力から時間は長くて 15 分以内に終了できることがわかった。また、読み手が 1 名であることから、登場人物やナレーションを含め、3 名以内でなければならないことがわかった。

ギミックとしてはめ込み式でかつ正答が明らかにわかるクイズ形式を考えたが、普及させる場合にコストがかかることから不採用とした。

「手洗い」はユニセフが 10 月 15 日を「世界手洗いの日」を設定し<sup>1)</sup>、手洗いダンスや紙芝居などを作成し普及啓発に努めている。紙芝居はギミックの使用はなく、すべて絵や写真による解説である。

ユニセフの手洗いの普及においては 6 つの場面にわかれている。順を追って手洗い

をするが、それを 3 次元的に目で見えるよう、石鹸や水がその場になくとも「動作」を参加者である子どもたちに見せ、できることが特徴である。

物語として共通の登場人物として「ケンくん」と「ワッシー (W a s h が由来)」がでてくる。

#### D. 今後の課題と展望

今後は、実際に試行し、改訂を計り、評価を実施しなければならない。

#### E. 参考文献

1) <http://handwashing.jp/>

#### F. 健康危険情報

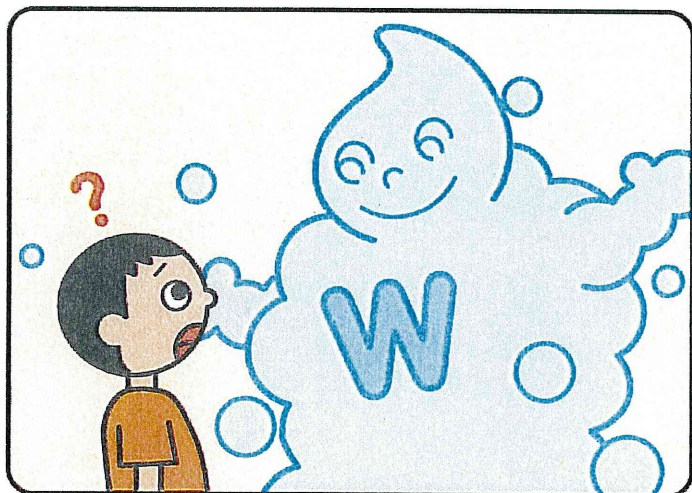
なし

#### G. 研究発表・学会発表

なし

#### H. 知的財産権の出願・登録状況

なし



ワ ケン君今まで何してた？  
ケ ゲームしてただけだよ！お外には出てないよ。  
ワ 手は洗った？  
ケ え？僕おうちにいて、  
ゲームのコントローラ使ってたただけだよ。  
ワ だから手は洗わなくていいでしょ。  
ワ じゃあケン君お手を見せて？  
ナ ワッシーはケン君にそう言い、  
ケン君の手を見ました。